

つの最終的な帰結ないし成果を、ここに見て取ることができるのではなかろうか。

註

- 1) Rombach, H., *Substanz, System, Struktur*, Bd. I, 1965, I. Kap. 3. S. 78ff.
- 2) *Ibid.*, S. 81.
- 3) *Ibid.*, S. 81.
- 4) Cf. *Ibid.*, S. 86.
- 5) N. de Cusa, *De docta ignorantia*, I-3 [5].
- 6) N. de Cusa, *De coniecturis*, I-Prologus [2].
- 7) 以下の記述は、普賢大圓『真宗概論』昭和59年、同書第六章「教判論」(265-89頁)による。
- 8) 同上, 268頁参照。
- 9) Cf. N. de Cusa, *De non-aliud*, 1462.

意見

田島 照久

本年度のシンポジウムの副題「〈神〉なき神」の「〈神〉なき」という表記には、現代という時代性を踏まえた一種の神批判というべき立場が前提されていると思われる。三人の提題者の理解を見ると、宮本氏は古代ギリシア・中世で成立した伝統的な「神」名・概念がその意義をすでに失ない、「神の没落」が語られざるをえない時代認識を読み込んでおられる。藺田氏も現代が神なき時代であり、神の見失われた時代であるという状況認識を語られている。以上のお二人とは多少異なり、リーゼンファー氏は「〈神〉なき」という副題を「聖書の権威に拠らず」、すなわち権威や聖書や救済史に依拠することのない立場から、というニュアンスで受けとめられているように思われる。その上で理性に基づく信仰の知解の例としてカンタペリーのアンセルムスを採用上げられ、理性の自己認識と神認識とはその過程においてもその到達点においても不可分であり、理性が自ら限界を洞察することは、同時に最高なるものの現実へと自らを開くことであると語られる。この「最高なるものの現実へと自らを開くこと」が理性の本質行為であるならば、最高なるものの現実がいかなる名を持つと、諸宗教の対話共存は理性において遂行されうる事柄であると考えてよいのであろうか。

宮本氏はトマスの「神名論」を手がかりにして、神名は知性に知られる神の無限な働きを示す相と他方でその知られざる無限の実体を示す相とに分けられると解釈した上で、ギリシア教父の神のエネルゲイアとウーシアの二相に重ね合わせ理解しようとしている。このことによって、スコラ的な神の本性的秩序を、受肉やケノーシスを含む差異化として再理解する途が拓かれると提言される。極めて魅力的な提言であるが、問題は宮本氏自身が意図的に排除した、エネルゲイアとウーシアの区分が *esse* と *essentia* にどのように対応するのかがやはり検討されねばならないのではないだろうか。

藺田氏はクザーヌスの思想を採り上げられ、神はクザーヌスにとってどこまでも知られざるもの、隠されたものでありながら、その無知の自覚に基づいた神の探求がなされていることに注目し、それを垂直的探求から水平的探求への転換という特徴のもとで親鸞の思想との対比を試みられた。その際、クザーヌス最晩年の思想である〈*non-aliud*〉という神概念に言及され、*non-aliud* を「場（所）のようなもの」と理解された。クザーヌスの *non-aliud* に関する思惟を簡単にまとめると次のようになるであろう。クザーヌスは、わたしたちに知識を得させるものは「定義」であるとし、一切を定義づけるとともに自分自身をも定義づける定義について語る。彼によれば「非他なるもの (*non-aliud*)」がこれである。「他者は他者に他ならない：*Aliud est non aliud quam aliud.*」と *non aliud* を介して *aliud* 一切が定義されるからである。自分みずからを定義するとは、「非他なるものは非他なるものに他ならない：*Non-aliud est non aliud quam non-aliud.*」からである。これは一般に *A est non aliud quam A.* という形式で語られる。

藺田氏はこの *non aliud* を指して一切の他のものを定義する「場」のようなものと語られたことになる。クザーヌスはこのコブラとしての *esse* を存在論的に読み替えているので、一切は *non(-)aliud* に基づいて存在していることになる。極めて興味深いのは、上述の一般形式の *A* を *non-aliud* あるいは *deus* としたときである。*non-aliud* を *non-aliud* たらしめる「場」としての *non(-)aliud* とは何か、あるいは *deus* を *deus* たらしめる *non(-)aliud* とはどんな事態を語るものなのかということである。藺田氏には是非この解釈を今後展開していただきたい。
